福岡教育大学紀要，第59号，第１分冊，11−18（2010）

1913−14年のT. S. エリオットの中道的思考と「姉崎講義ノート」

T. S. Eliot's Moderate Thinking from 1913 to 1914 and "Notes on Anesaki's Lectures"

古　賀　元　章

Motoaki KOGA
英語教育講座

（平成21年９月30日受理）

はじめに

1913−14年にハーバード大学大学院生のT. S. Eliot（1888−1965）は，観念論哲学者Josiah Royce（1893−1916）のセミナー "A Comparative Study of Various Types of Scientific Method" に論文や覚え書を提出している。そこには，後述するように，イギリスの観念論哲学者F. H. Bradley（1846−1924）の哲学思想の影響を受けて，中道的思考を展開している彼の姿が認められる。

同じ頃のエリオットは，ハーバードから招聘されて仏教を講義する東京帝国大学教授の姉崎正治（1873−1949）の講義 "Schools of Religious and Philosophical Thoughts in Japan" を受けている。エリオットはこの講義をメモした「姉崎講義ノート」[1] を書き残している。このノートを見ると，姉崎が紹介する仏教思想はブラッドリーの哲学思想と類似点がうかがわれる。

このように，1913−14年のエリオットの中道的思考は，ブラッドリーの哲学思想を踏まえて形成されている。その際に，姉崎の講義内容はこの哲学思想の学問的な裏づけとして役立っているように思われる。そこで，「姉崎講義ノート」の内容の一端に注目して，本稿はこの時期に見られる彼の中道的思考を今少し掘り下げて探究したい。[2]

1

大学院生のエリオットは，1913年９月から翌年５月までロイスのセミナーを受講している。エリオットは，1926年に母親Charlotte Champe Eliot（1843−1929）が出版した*Savonarola*の序文の中で，このセミナーで1913年12月９日に読み上げた論文 "The Interpretation of Primitive Ritual" について次のように回想している。

> Some years ago, in a paper on *The Interpretation of Primitive Ritual*, I made an humble attempt to show that in many cases *no* interpretation of a rite could explain its origin. For the meaning of the series of acts is to the performers themselves an interpretation; the same ritual remaining practically unchanged may assume different meanings for different generations of performers; and the rite may even have originated before "meaning" meant anything at all.（viii）

儀式は当事者の未開人自身による解釈であって，その起源を説明できないという。なぜなら，同じ儀式であっても，世代によってその意味は変わるかもしれないからである。そこで，彼の結論は，唯一の事実が実際の儀式そのものの解釈ということである（Gray 128）。言い換えれば，事実は〈今・ここ〉ということになる。

1913年12月16日に，エリオットは“Communication and Inspection”という見出しのある覚え書“Communication and Interpretation”をロイスのセミナーに提出している。“What is the status of a fact which includes a belief or a meaning?”（qtd. in Smith 83）というエリオットの問いを巡って，二人の間でやり取りがある。ロイスは，意味に注意を払わないで宗教現象を考えている。その事例は，ローマカトリック教徒がローマ教皇の不可謬性を共有して，司祭の言葉を信じて疑わないことである。しかし，エリオットは宗教現象の外面からとらえられた事実の意味を問題提起しているのである（Smith 83）。

1914年2月24日にエリオットが読み上げた覚え書“Description and Explanation”は，当事者の視点が変化するので，記述と説明の区別を否定している。彼の発言内容を記す“Points-of-view monadology”（Smith 119）という語に関して，覚え書の欄外に“Not wholly false nor true that an explanation is wholly wrong.”（Smith 119n）と書かれている。この欄外の記述は視点の相対化を示唆している。

同年3月17日に，“Cause as Ideal Construction”という見出しのエリオットの論文が同じ大学院生のNarenda Nath Sen Gupta（1889－1944）により代読されている（Smith 138）。この論文は，フランスの社会学者Lucian Lévy-Bruhl（1857－1939）の「融即の法則」（la loi de participation）[3] を参考にして，因果関係，偶然，意志が観念的な構成体であることを述べている。ここでは，意志に焦点を当ててみたい。

レヴィ＝ブリュールは，原始人の心性がはっきり説明できない前論理的ものであることを強調する。「融即の法則」の例として挙げられているのは，ブラジルのボロボロ族が，現在のままの人間であると同時に，インコでもあると信じていることである（Lévy-Bruhl 77-78）。エリオットはこのような法則を下敷きにして，自他の意志を直接に知ることができないと考えている。この立場から，自他の意志は解釈によって理解されるということになる。意志は客観的に実在するのではなくて，われわれの頭の中で考え出される。そこで，事実と観念は個別に分かれて存在しないのである。そのことは， 彼が記した“there is nothing strictly fact and nothing strictly ideal.”（qtd. in Jain 142）という文から理解できよう。

1914年5月5日のセミナーで発表された“Classification of Types of Object”という論文は，事実と観念との関係をさらに展開している。このセミナーの記録者であるHarry T. Costelloは，その関係について，“In [an] idea there is only *reference* and not the material part of the sign. Then there are facts.”（Smith 173）と書いている。このような記述から判断して，意識内容である観念の志向する先が事実である。志向の対象が事実となるとき，観念の内容と事実の内容は深くかかわっているのである。

こうして，ロイスのセミナーで見られるエリオットの事実論は，極端に走らないで穏当な見方をする中道的思考に基づいて展開されていることがわかる。この中道的思考の骨子は次のように要約できよう。

① 事実認識の出発点は〈今・ここ〉で認識者と対象の直接の結びつきである。
② 事実は認識者と対象の相関関係によって認識される。

①は1913年12月9日の論文の結論である。そこで1913－14年の彼は，①を土台にして②を構築し，中道的思考を形成しているのである。

このようなエリオットの中道的思考の骨子には，ブラッドリーの哲学思想の影響が見られる。その影響について考察したい。

エリオットは1913年6月にブラッドリーの*Appearance and Reality*を購入し（Ackroyd 11），ロイスのセミナーに出席していた頃にこの哲学者を勉強している（Smith 194）。ブラッドリーの著書には次のような論考がある。

> An honest and truth-seeking scepticism pushes questions to the ends, and knows that the end lies hid in that which is assumed at the beginning. (*Appearance and Reality* 379)

懐疑主義者のブラッドリーにとって，諸問題を終わりまで追求すると，その解決は思案した所に見出されることになる。諸問題の解決（終わり）は諸問題の思案（始め）に内在している。それは，始めと終わりの同

時存在の考えによるものである。彼が実在を認識する原点は，無時間・無場所で主客合一の「直接経験」（“immediate experience”）[4] である。これは，われわれの想定上のことなので，事実認識は現実の対象の世界の中で起きる。そこで，始めと終わりの同時存在の考えは，上述の①に行き着くのである。

エリオットは 1913 年に脱稿した未発表の “Degrees of Reality” の中で次のような文章を書いている。

> The token that a philosophy is true, I think, the fact that it brings us to the exact point from which we started.（qtd. in Perl and Tuck 119）

彼は，哲学の真実がわれわれの探求の出発点にあることを示唆している。この示唆は，上で引用した *Appearance and Reality* の文章に見られるようなブラッドリーの哲学思想（始めと終わりの同時存在）を踏まえている。

ここで，エリオットが “Degrees of Reality” の脱稿と同じ頃にロイスのセミナーに出席したことに注目したい。そうすると，彼はブラッドリーの哲学思想を拠り所にして，1913 年 12 月 9 日の論文の結論に達したと言える。

ブラッドリーの *Appearance and Reality* に見られる次のような考えにも目を向けてみよう。

> There is truth in every idea however false, there is reality in every existence however slight; and, where we can point to reality or truth, there is the one undivided life of the Absolute. Appearance without reality would be impossible, for what then could appear? And reality without appearance would be nothing, for there certainly is nothing outside appearances.（431-32）

彼によれば，われわれがあらゆる観念に宿る真理やあらゆる存在に宿る実在を指すところには，「直接経験」の完全態である「絶対者」（“the Absolute”）の生命がある（輪島 12）。現実社会の仮象と実在は不可分であるので，前者に後者が内在する。したがって，実在としての「絶対者」は仮象と相対的な関係にある。彼は，このような関係を「実在と真理の度合」（“degrees of truth and reality”）[5] として提唱している。

そこで，ブラッドリーにとって現実社会における事実は，エリオットの中道的思考の骨子②のように，認識者と対象の相関関係によって認識されるということになる。そうすると，この②に認められるエリオットの相関関係論は，ブラッドリーの相関関係論の影響を受けていると言える。

2

少年エリオットは家の書斎で，仏教の開祖 Gautama Buddha の生涯を書いたイギリスの詩人 Sir Edwin Arnold（1831－1904）の長編叙事詩 *The Light of Asia* を読んで深く感動している（“What Is Minor Poetry?” 42）。それ以来，仏教に興味を持った大学院生の彼は，ハーバードの招聘教授である東京帝国大学教授の姉崎正治（1873－1949）が講義する科目に出席している。この講義は 1913 年 10 月 3 日から翌年 5 月 15 日まで行われている。ハーバード大学のホートン図書館は，エリオットが書き留めた講義内容を “Notes on Eastern Philosophy” と記して保存している。（注 1 を参照）

「姉崎講義ノート」の書き出しは，“The version which Nagarjuna had was different from any present Pali text.” という文である。この文は，大乗仏教中観派（ちゅうがんは）の祖であるインド人の Nāgārjuna（150－250頃）がサンスクリッド語で著した『中論』を指している。同書第 1 章の帰敬偈は次のように記述されている。

> 〔何ものも〕滅することなく（不滅），〔何ものも〕生じることなく（不生），〔何ものも〕断滅ではなく（不断），〔何ものも〕常住ではなく（不常），〔何ものも〕同一であることなく（不一義），〔何ものも〕異なっていることなく（不異義），〔何ものも〕来ることなく（不来），〔何ものも〕去ることのない（不去）〔ような〕，
> 〔また〕戯論（けろん）（想定された議論）が寂滅しており，吉祥である（めでたい），そのような縁起を説示され

た，正しく覚ったもの（ブッダ）に，もろもろの説法者のなかで最も すぐれた人として，わたしは敬礼する。(『中論』(上) 85)

「滅することなく」から「去ることのない」までは八つの否定辞となっていることから，この帰敬偈は八不の偈と言われている。八不によって，肯定は肯定，否定は否定という通常の考え方（戯論[6]）が打ち消されている。姉崎のレジュメでは，そのことが，“All vain talkings are cut down / By the sharp sword of the eightfold negation”（“Notes on Eastern Philosophy” 60）とういう表現で紹介されている。こうした通常の考え方の代わりに持ち出されているのが，ブッダの唱える〈縁起〉[7] である。この〈縁起〉は，仏教の開祖の〈中道〉[8] に立脚した〈空〉[9] である。そこで，ナーガールジュナは，三つの真理（〈縁起〉，〈空〉，〈中道〉）を悟ったブッダへの帰依を表明しているのである。

ここで，ブッダの中道思想を継承するナーガールジュの仏教思想の特徴を検討してみたい。〈空〉である一切のものは〈縁起〉によって初めて認識される。この〈縁起〉は一切のものに見られる相関関係の役割を果たしている。これが〈中道〉の考えの土台となっている。このようにナーガールジュの仏教思想の特徴を理解すれば，彼とブラッドリーは共に相関関係論を構築しているのがわかるであろう。そうすると，エリオットは自らの中道的思考の骨子②を形成するにあたり，ブラッドリーの場合と似通ったナーガールジュの相関関係論も参考になったであろうと思われる。

姉崎は，“The Heritage of the Sole Great Thing of Life and Death.(written in 1272)” という見出しのレジュメで次のような文章を書き綴っている。

> Should the Bodhisattva Visistacarita [Viśiṣṭa-cāritra] appear in these days of the Latter Law for prepagating this gateway of truth, or should he not appear? The Scripture tell [tells] us that he should appear, – yet would it be so? Would the Bodhisattva appear or not? In any way, I, Nic[h]iren, have now done the pioneer work. Whatever might happen to you, arouse a strong faith and pray in sincerity that you could, at the moment of death, utter the Sacred Title in clear consciousness and in earnest belief. Do not seek beside this any heritage of the sole great thing of life and death. Herein lies the truth of the saying that there is Bodhi even in depravities and Nirvana [Nirvāṇa] even in life and death. (“Notes on Eastern Philosophy” 72)

英文の見出しは，日蓮宗の開祖の日蓮（1222−82）が弟子の最蓮房の問いに対して 1272 年に書いた「生死一大事血脈鈔」を指している。姉崎は，1916 年に *Nichiren: The Buddhist Prophet* を出版し，1930 年にその英文書を邦訳した『法華経の行者　日蓮』を出版している。上の引用文は，1916 年の英文書と 1930 年の邦訳書がそれぞれ，1272 年の「生死一大事血脈鈔」から引用した次のような文章に見られる。

> Will the Bodhisattva Viśiṣṭa-cāritra appear in these days of the Latter to open wide the gateway of the Truth, or will he not appear? The Scripture tells us so; yet will it surely happen? Will the Bodhisattva appear, or not. At any way, I, Nichiren, have now accomplished the pioneer work.
>
> Whatever may happen to you, arouse in yourselves a strong faith and pray that you may, at the moment of death, utter the Sacred Title in clear consciousness and with earnest faith! Do not seek besides this any heritage of the sole great thing concerning life and death. Herein lies the truth of the saying that there is Bodhi even in depravities, and Nirvāna [Nirvāṇa] even in life and death. (67)

> 上行菩薩[10]，末法，今の時，此の法門を弘めんが為に御出現之あるべき由，経文には見え候へども如何候やらん。上行菩薩出現するとやせん，出現せずとやせん。日蓮先づ粗弘め候なり。相構へ相構へて強盛の大信力を致して，南無妙法蓮華経，臨終正念と折念し給へ。生死一大事の血脈此より外に全く求むことなかれ。煩悩[11] 即菩提[12]，生死即涅槃[13] とは是れ他。(261)

これら三書の中で，“there is Bodhi even in depravities, and Nirvāṇa even in life and death.”（「煩悩即菩提，生死即涅槃」）という文に注目してみよう。姉崎は邦訳書の中で，この文について次のように解説している。

> 要するに，肉身の誕生からその死に至るまで，一期の生死も，宇宙の生々の一部としてこれを観じ，その理を身に体すれば，その中に永遠なる生死の脈拍がうつ，しからば，生死の間に発動する欲求煩悩も，久遠の生命を体現する努力として観れば，その中に成仏道すなわち涅槃の理想が現れてくる。
> 「即」ということを，「直ちにそれが」という意味でなく，「その本性を基本としてその性相を転換すれば」という義に見れば，煩悩の中に菩提ありということで、煩悩即菩提，また生死即涅槃となる。（262）

このような姉崎の解説からわかるのは，人間の煩悩の中に悟りが得られるし，人間の一生の中に心の安らぎが得られる，ということである。彼の解説は，そのように気づくのが，いつでもどこでも〈今・ここ〉においてであることを意味する。日蓮の 1272 年の書に触れた彼のレジュメはエリオットに，そのことを教えたと思われる。この教えが，同じような見方をするブラッドリーの哲学思想と共に，既述した彼の中道的思考②に反映されているであろう。

3

当時のエリオットの頭の中で，ブラッドリーの哲学思想と姉崎の仏教思想がどのように結びついていたのであろうか。この点について検討してみたい。

ヨーガ学派[14] の実在と仏教大衆部の一派[15] の実在を姉崎から学んだとき，エリオットは次のように書き記している。

> The Tathāgata is always in Yoga, near sleeps or dreams. He is omniscient in any single moment – this becomes lotos on important tenet. His being becomes the whole cosmos.
> One section of Mahasmghika went another in distinguishing the appearance and the real, & thought these two to be an uncompromising anthithesis (Bradley). loka artha and parama artha.（“Notes on Eastern Philosophy” 6；村田 32 に引用）

> 如来は常にヨーガの中にある。睡眠の近く、夢の中に。「如来」はあらゆる刹那に遍在する。これは重要な教義の蓮華となる。この存在が全宇宙となる。
> 大衆部の一派は別の道を辿り、実在的なものと観念的なものや思考を区別するに至る。これら二つは絶対的に相容れない対立となる（ブラッドリー）。世俗と勝義。（村田訳 32）

ヨーガ学派の実在としての如来（真に実在するもの［村田 32］）は，どんな瞬間にでも，ヨーガ（統一された心的状態，主客統合の精神状態［村田 32］）に現れる。この重要な教義が蓮華として示されるし，如来の存在が全宇宙となる。他方，仏教大衆部の一派については，“most of them confused the real & mythological Buddha”（“Notes on Eastern Philosophy” 6 ）と小さい字で書き込みがされていることから，実在的なものと観念や思考によるものを区別する。後者が世俗[16] に属し、前者が勝義に属すると言える。仏教大衆部の一派の実在観を聞いたとき，エリオットはブラッドリーの名前を括弧の中に書き込んでいる。この哲学者は，ヨーガ学派と同じように，実在（勝義）と現象（世俗）を一体化する。そこで，エリオットは，仏教大衆部の一派の実在観がこの哲学者の実在観と違うことを思い起こしているのである。

このように，エリオットの［姉崎講義ノート］がブラッドリーの哲学思想と姉崎の仏教思想との具体的な接点を示している。なぜ彼はこれら二つの思想を受容できたのであろうか。この受容は彼の中道的思考とどのような関係になっているのであろうか。これら二つの点を考えてみることにする。

セントルイスのスミス・アカデミー（Smith Academy）に通っていた少年時代のエリオットは，1899 年に “T. S. Eliot / The T. S. Eliot Co. / St. Louis.”（Soldo 13）と記された “Fireside” という未発表

の雑誌を出している。同雑誌には，“Miss End and Mr. Front are Engaged. It is only known to a few.”（qtd. in Soldo 15）という表現があり，Mr Up と Miss Down の駆け落ちの表現もある（Crawford １）。この時期には，アメリカが西部へと拡大する基点がセントルイスからシカゴへとすでに移っていたけれども（徳永 14），その名残が前者の都市にまだ存在していたであろう。そこでエリオットは，住んでいた場所が都市の終着点と辺境地への出発点が共存していたことを実感したと思われる。

少年エリオットには相反する事柄の同時存在の考えを抱いている一方で，青年エリオットには懐疑主義的な性格がうかがわれる（“To J. H. Woods,” 28 Jan. 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 84)。このような事情を背景にして事実認識を探究したとき，大学院生のエリオットはその認識による学問上の答えの一端をブラッドリーの哲学思想に発見したと言えるであろうし，この哲学思想の理解に役立つ知識を姉崎が講義する仏教思想から得たと言えるであろう。そうした指摘が，彼の中道的思考の骨子①の形成に反映されていると判断される。

Norbert Weiner への 1915 年 1 月 6 日付の手紙（*Letters* 146）の中で，エリオットは自分が相対的な性格であることを表明している。彼は，自らの性格に基づく事実認識の学問上の別の答えを，中道的思考の骨子①の形成の場合と同じような方法で見出したと思われる。その答えがこの骨子②に盛り込まれているであろう。

おわりに

1913－14 年のエリオットはロイスのセミナーに提出した論文や覚え書の中で，その頃に興味を持って読んでいたブラッドリーの哲学書の影響を受けて，中道的思考によるの事実認識のあり方を追究している。そうした追究の背景には，少年時代の家庭環境が土台となっているばかりではなく，同じような性格（懐疑主義，相対主義）を拠り所した論の展開も認められる。

当時のエリオットは，日本から来た宗教学者の姉崎から仏教思想を学んでいる。彼はその講義内容を記した「姉崎講義ノート」の中で，仏教大衆部の一派の実在観がブラッドリーの実在観（たとえば，絶対者観）と同じく一元論的であることを思い出すメモを書き残している。また，ナーガールジュや日蓮が紹介された「姉崎講義ノート」の内容の一端を検討した結果，東洋の仏教思想がブラッドリーの哲学思想と類似していることがわかる。そうすると，ロイスのセミナーで中道的思考の事実認識を展開していたときのエリオットは，姉崎の講義の場合のように，仏教思想を強く意識していたと思われる。その点で，「姉崎講義ノート」はブラッドリーと共に，彼の中道的思考の形成にかかわっていると判断できよう。

(姉崎正治の孫にあたる近畿医療福祉大学教授の姉崎正平先生（日本大学医学部教授，福岡医療福祉大学（前第一福祉大学）教授を歴任）が T. S. エリオット夫人に手紙を書き，エリオットの原稿などの著作権を管理するイギリスの Faber and Faber 社とエリオットの原稿を保存するハーバード大学ホートン図書館のご厚意により，嶋田和子氏（日本大学等非常勤講師）と著者は彼の未発表の「姉崎講義ノート」を研究することができました。関係各位のご協力・ご厚意に感謝いたします。)

注

1．「姉崎講義ノート」は，ハーバード大学ホートン図書館に保存されている。このノートについては，“Eliot, Thomas Stearns, 1888-1965. [Notes on Eastern Philosophy] A. MS. and TS.（carbon copy）with A. MS. annotations; 3 Oct. [1913] －15 May [1914]. 62s.（80p.)” と書かれている。
2．本稿は，拙稿「1913－14年におけるT. S. エリオットの中道的思考―F. H.ブラッドリーと姉崎正治の影響―」の記述内容を展開させたものであることをお断りしたい。
3．「融即の法則」については，下記の解説を参照。

「未開人の心性の特徴としてレヴィ＝ブリュールの用いた言葉で，一個の事物あるいは人間をそれ自身であり，また他のものでもあるとするような思考の型をさす。例えば，ある部族は自分たちがいま

ある通りの人間であると同時に「金剛インコ」でもあると信じている。レヴィ＝ブリュールはこのような心的活動を西洋的な論理法則に対比して「論理以前的」とも述べている。」(『〔縮刷版〕社会学事典』886)

4.「直接経験」の詳細については，*Essays on Truth and Reality* 151-59 を参照。

5.「実在と真理の度合」の詳細については，*Appearance and Reality* 318-54 を参照。

6. 戯論については，下記の解説を参照。

「竜樹（ナーガールジュナ）によれば，戯論は妄分別，さらには業と煩悩を生む原因であり，それは空性を知ることによって滅するという。」(『岩波仏教辞典　第 2 版』280)

7.〈縁起〉については，下記の解説を参照。

「縁って生起すること。ゴータマ-ブッダ（釈迦）の悟りの内容を表明すると伝えられる，仏教の根本教理の一つ。生存の苦悩はいかにして生起し，また消滅するのかを示す，諸法の因果関係。」(同 95)

8.〈中道〉については，下記の解説を参照。

「相互に矛盾対立する二つの極端な立場（二辺）のどれからも離れた自由な立場，〈中〉の実践のこと。〈中〉は二つのものの中間ではなく，二つのものから離れ，矛盾対立を超えることを意味し，〈道〉は実践・方法を指す。仏陀は苦行主義と快楽主義のいずれにも片寄らない〈不苦不楽の中道〉を特徴とする八正道によって，悟りに到達したとされる。仏陀はまた，縁起の道理にしたがう諸法は，生じるのであるから無ということはなく，また滅するのであるから有ということはないという意味で，〈非有非無の中道〉であると説く。」(同 714-15)

9.〈空〉については，下説の解説を参照。

「固体実体の無いこと。実体性を欠けていること。」(同 238)

10. 上行菩薩については，下記の解説を参照。

「法華経従池湧出品で説かれる，大地から湧き出た地湧の菩薩の代表である上行・無辺行・浄行・安立行の四大菩薩の筆頭。」(同 517)

11. 煩悩については，下記の解説を参照。

「身心を乱し悩ませる汚れた心的活動の総称。輪廻転生をもたらす業を引き起こすことによって，業とともに，衆生を苦しみに満ちた迷いの世界に繋ぎ止めておく原因となるものである。」(同 945)

12. 菩提については，下記の解説を参照。

「悟りの智慧。これを得た者が仏であり，これを目指す有情（衆生）を菩薩という。」(同 923)

13. ニルヴァーナ（涅槃）については，下記の解説を参照。

「煩悩を断じて絶対的な静寂に達した状態。仏教における理想の境地。」(『広辞苑　第 5 版』2071)

14. ヨーガ学派については，〈ヨーガ〉の下記の解説を参照。

「基本的には，解脱（悟り）に向けてのなんらかの〈実践〉〈修行〉，特に〈精神統一〉と解し得る。

その起源をインダス文明にまで辿りうるともいわれる，ある点では曖昧模糊としたこの〈ヨーガ〉という語の意義を明確にしたのは，その名前を付せられたインドの六派哲学の一派〈ヨーガ学派〉である。その成立への仏教からの影響も看過しえぬほか，有神論という点では区別されるものの形而上学をほぼ同じくする点でサーンキヤ学派とは密接な関係を指摘される。」(『岩波仏教辞典　第 2 版』1029)

15. この一派について村田氏は僧祇部などを考えている（32)。僧祇は「教団を構成する衆層」(『岩波仏教辞典　第 2 版』631）である。

16. 世俗と後述する勝義については，〈勝義〉の下記の解説を参照。

「大乗仏教では，〈勝義〉と〈世俗〉の二つの真実（二諦）があると説く。〈世俗〉は常識的真実，〈勝義〉は超世間的な真実で無分別知の対象である。」(同 515)

引用文献

Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life.* New York: Simon and Schuster, 1984.

Anesaki, Masaharu (姉崎正治). *Nichiren: The Buddhist Prophet.* Cambridge: Harvard UP, 1916. Gloucester, Mass: Peter Smith, 1966.

Arnold, Edwin, Sr. *The Light of Asia: or, The Great Renunciation* (*Mahâbhinishkramana*)*: Being the Life and Teaching of Gautama, Prince of India and Founder of Buddhism* (*As Told in Verse by an Indian Buddhist*). New York: Mershon, 1879. London: Routledge & Kegan Paul, 1954.

Bradley, F. H. *Appearance and Reality: A Metaphysical Essay.* 1893. Oxford: Clarendon P, 1966.

---. *Essays on Truth and Reality*, 1914. Oxford: Clarendon P, 1962.

Crawford, Robert. *The Savage and the City in the Work of T. S. Eliot*. 1987. Oxford: Clarendon P, 1990.

Eliot, T. S. "Degrees of Reality." Unpublished essay. 1913. The John Davy Hayward Bequest of T. S. Eliot's Literary Manuscripts. King's College Library, Cambridge.

---. "Notes on Eastern Philosophy." Unpublished notes. 3 Oct. 1913-15 May 1914. The Houghton Library. Harvard U, Mass. 1-80.

---. Introduction. *Savonarola.* By Charlotte Champe Eliot. London: R. Cobden-Sanderson, 1926. vii-xii.

---. "What Is Minor Poetry?" 1944. *On Poetry and Poets.* 1957. London: Faber and Faber, 1969. 39-52.

---. *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1, 1898-1922.* Ed. Valerie Eliot. London: Faber and Faber, 1988.

Gray, Piers. *T. S. Eliot's Intellectual and Poetic Development, 1909-1922.* Brighton, Sussex: Harvester P, 1982.

Jain, Manju. *T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years.* Cambridge: Cambridge UP, 1992.

Lévy-Bruhl, Lucian. *Les fonction mentales dans les sociétés in fériures.* Paris: Librarie Félix Alcan, 1928.

Perl, Jeffrey M., and Andrew Tuck. "The Hidden Advantage of Tradition: On the Significance of T. S. Eliot's Indic Studies." *Philosophy East and West* 35.2 (Apr. 1985): 115-31.

Smith, Grover, ed. *Josiah Royce's Seminar, 1913-1914: As Recorded in the Notebooks of Harry T. Costello.* New Burnswick, NJ: Rutgers UP, 1963.

Soldo, John J. *The Tempering of T. S. Eliot.* Ann Arbor, Michigan: UMI Research P, 1983.

姉崎正治.『法華経の行者　日蓮』. 1983. 東京：講談社, 1993.

古賀元章.「1913－14年におけるT. S. エリオットの中道的思考―F. H.ブラッドリーと姉崎正治の影響―」『Comparatio』12 (2008): viii-xxi.

三枝充悳.『中論』(上). 1984. 東京: 第三文明社. 1992. 全3冊 (上・中・下). 1984.

新村　出編.『広辞苑　第5版』. 1955. 東京: 岩波書店, 1998.

徳永陽三.『T. S. エリオット』(人と思想 102). 東京: 清水書院, 1992. 全188冊. 1966-2009.

見田宗介・栗原彬・田中義久編.『〔縮刷版〕社会学事典』. 1994. 東京: 弘文堂, 2001.

中村　元・福永光司・田村芳朗・今野　達・末木文美士. 『岩波仏教辞典　第2版』. 1989. 東京: 岩波書店, 2002.

村田辰夫.『T. S. エリオットと印度・仏教思想』. 東京: 国文社, 1998.

輪島士郎.『T. S. エリオットの詩と真実』. 金沢: 高島出版, 1988.